

# 公開講演会『日本文化論の昨今』

－外国から見た場合と日本から見た場合－

日時：2001年5月31日

於：京都文教大学

ベフ・ハルミ<sup>1)</sup>

ベフ・ハルミ：今日は、どのようなお話をしたらいいのか、白石先生といろいろ相談いたしまして、結局日本文化論についてお話をさせていただくことにしました。私はこの問題に長年取り組んでおりまして、先月、やっと私の考えをまとめたものが*Hegemony of Homogeneity* (Trans Pacific Press, 2001)という題の本になって出ました。副題は、*Anthropological analysis of Nihonjinron*です。この本を書くことになりました経緯は、ずいぶん前までさかのぼります。

私は、スタンフォード大学で日本文化についての講義を毎年やってきましたが、アメリカ人に日本のことを教えることの難しさをつくづく感じておりました。そのひとつの理由は講義を聞いている学生のほとんどが、日本の土を踏んだことがないことです。どうして日本に関心があるのかと聞きますと、「黒澤の映画を観て感激した」とか、あるいは「日本のマンガに魅せられた」とか、「日本がどうして経済大国になったか知りたい」とか、非常に偏った情報しかもっていない。彼らのもっている日本像、日本のイメージは非常に限られたものです。それも場合によってはゆがめられた、間違ったイメージであることが多い。そういう学生たちにどのように日本文化について正確な理解をもってもらおうかという非常に大きな、難しい問題があります。

ここにいらっしゃる文化人類学科の先生方で、外国でフィールドワークをされて、日本に帰ってこられて、学生達に外国の文化のこと、それはアフリカのカンパでもよいし、太平洋のトンガでもよいのですが、そういう文化について日本の学生に説明するときに同じような難しさ、歯がゆさを

感じられると思いますが、それとまったく同じことなんです。この問題をどのように乗り越えていけばよいのかということを常に考えながら教なければなりません。

日本についての英語の本はいろいろあります。そういう本を学生に読ませるんですが、このような本には間違った考えを述べてあることがよくあります。得てして、ステレオタイプな日本像を描き出していることも多いのです。それをどのように是正したらよいのか、学生にわからせたらよいのかという問題に常に直面しています。例えば、60年代、70年代にはアメリカでは「日本人は集団主義的である」と論じていました。日本人に「日本人には集団主義的な傾向がある」と言えば、「なるほど、そういう面もある」と納得されるでしょう。ですけれども、集団的に行動しないことも多くあると言う認識もあります。日本の全体像を個人的に、経験的に把握している、その体験的文脈のなかで日本人の集団的行為を理解します。文化的コンテキストの中で日本人の集団主義がどこにあるのかを個人的に把握していくことになります。ところがアメリカ人に「日本人は集団的だ」といいますと、日本人が集団的であるということだけが頭に残り、日本人は集団の中でしか生活しない、所属集団以外の個人はないというふうにとらえられがちです。集団主義の日本人像がひとり歩きしていきうことになります。

もうひとつ問題があります。どうして日本人の集団主義がアメリカで安易に受け入れられるかということです。日本とアメリカを対照してみますと、アメリカは皆さんもご存知のように個人主義的な社会です。日本の社会・文化をアメリカ人に理解させるためには、日本とアメリカがどのような類似性をもっているかということを理解するこ

1) スタンフォード大学名誉教授 前 京都文教大学教授

とが一つです。もうひとつは、日本とアメリカがどんなに違うかということです。そのときに、「アメリカは個人主義、日本は集団主義」、このような対照ができますと、非常に教えやすい。理論的な立場から言いますと、文化の描写には、絶対的なものがあるのではなく、他者である文化を自己の文化の立場でどう説明するかということです。たとえば、韓国人の人類学者が、韓国の学生に日本について説明する時には韓国文化との比較の立場から説明します。これはアメリカ人の先生がアメリカ人の学生にする説明とは違った日本像になる。これは当然のことです。そこに文化の相対性があります。

民族誌は、絶対的なものがあるのではなくて、どういう他者が民族誌を書いているのかということによって違ってきます。ということで、アメリカで日本文化を説く場合には、「アメリカの個人主義、日本の集団主義」という対照が浮かびあがってくる。それだけではない。アメリカでは個人主義はイデオロギーです。非常に重要な価値観です。集団主義というのは個人主義と相対するものですから、個人主義の価値をもっていないということが対象になる基礎です。ですから彼らの価値体系からいえば、当然個人主義が優れていて集団主義はそれに劣るという結論になります。そうすると、文化の相対性ということ、つまり各文化は同等の立場にあるという原則からかけ離れてしまって、アメリカ文化のほうが日本文化より優れているという結論になってしまう。そういう落とし穴があります。

そのようなことから、私は1970年代後半からこういう日本の見方は間違っているんだということをアメリカで機会あるごとに言ってまわっていました。はじめはなかなか信じてくれませんでした。私が長々と日本集団主義論が間違っていることを議論したあとで、聴衆の間で、「しかし日本はほんとに集団的なんだ」と言われ、げっそりしたこともあります。それから20年以上たちまして、今ではそのような本質論的なことをいう人類学者は少なくなりました。それ以来、日本集団主義論や日本文化論に関するシンポジウムを幾多やりまして、次第に問題は日本の集団主義だけでは

なくて、日本文化の理解そのものに本質論的な間違いがあるんだと考えるようになりました。そして広範囲に日本文化論全体を考えてみよう、いろいろな文献に当たりました。そうしますと、日本文化論について書かれている文献が膨大なものであるということが分かってきました。その主なものだけを読んでいるうちに20年以上たってしまいました。

この本、*Hegemony of Homogeneity*は英語圏の人たちにむけて書いたものです。それはただ単に英語で書いてあるということだけでなく、この本に書いてある内容、あるいは説明の仕方、議論、論理の立て方というものが、欧米の人たちの理解するものであって、必ずしも日本人がそのまま理解できるように書かれてはいないということです。これは非常に重要なことです。それをまず理解していただきたいと思います。ということはこの本をそのまま翻訳した場合、それを読まれたら部分的にはこんなつまらないことが書いてあるというふうに思われるかもしれませんし、部分的にはここのところが全然わからないということがあると思います。

「こんなにつまらない」というのは、この本の第二章に日本文化論の種々の命題が書いてあります。たとえば集団主義とか、和を尊ぶとか、日本語によって日本文化というものの本質が伝えられるとか、日本の農耕作業が日本の集団組織を作る基礎になっているというようなことです。このような命題は、日本にずっと住んでおられる方、大学教育まで受けられた方なら、そのような言説があると言うことははくどく言う必要はありません。この章を読まれたらあまりくどく書きすぎているのではないと思われる嫌いがあると思います。しかし日本体験のない、または日本についての客観的知識もゼロに近いアメリカ人人に理解させるためには、それほど詳しく書かないと理解が難しいのです。その反面、第4章には日本文化論の命題を構築するためのいろいろな前提、あるいは思考法とか、また日本文化論の人類学的な解釈が書いてあるのですが、この章は当然アメリカやイギリスなどでごく当たり前になっているような議論の仕方とか、理論などをふまえた上で書かれ

ています。ですから、日本人がその章を読まれたら、ちょっとわかりにくいというようなことがあると思います。もうひとつ、この本で分析しました対象になりますものは、日本人が書いた日本文化論です。

外国人の書いた日本文化論もたくさんあります。1978年に野村総合研究所が『日本人論』という題の文献目録を出しました。そこには約800の本が出ていますが、そのうちの約10%が外国人の書かれたものです。みなさんも例えばベネディクトの『菊と刀』とか、ライシャワーの『ザ・ジャパニーズ』や、ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』のような本をご存知だと思います。このような、外国人の書いた日本文化論はたくさんありますが、私の本では外国人の書いた本は一応排除して、日本人の書いた日本文化論だけをとりあげました。日本人の書いた日本文化論とアメリカ人の書いた日本文化論とがどう違うのかとといいますと、内容的に似たものもたくさんありますが、根本的に違う点は、日本人が書いている場合は、あくまでも「自者」について書いています。自文化について書いています。外国人が書いている場合は「他者」について書いています。その決定的な違いは、日本人が書いている場合は、自分のアイデンティティというものと、自分が今書こうとしている日本文化のアイデンティティが、ごっちゃになっているということです。日本人の知識人の中には、日本文化と距離をおいて日本文化を批判する立場をとって書いている人もいます。しかし、いくらそうはいっても、外国人が日本をみるのとは違います。やはり、自分の文化とのinvolvement（主観的一体感）は避けられない。外国人が平気で言えるような日本文化への批判も日本人ならやはり控えるようなことも当然あります。そういう風ないろいろな違いがありますので、ここでは、日本人のアイデンティティ、日本人自身が唱えている、つくりあげている、説明しているアイデンティティの文言、言説について書きました。

ここで「命題」と「前提」とを区別して使っています。命題といいますのは、日本人は和を尊ぶとか、日本人は集団的だとか、そういった命題で

す。前提というのは日本人が本質的に日本文化は純粋文化であるとか、日本人は単一民族であるとか、そういった考え方を私は前提としております。このことにつきましてはまたあとで述べたいと思います。

第2章では、日本文化論のいろいろな命題をとりあげました。ごく簡単に申し上げますと、私は、和辻哲郎の『風土』から議論をはじめます。この本は1935年書かれたものですが、いまだに本屋に並んでいまして、一年に一回くらい新しい版が刷られています。とういことで、現在でも広く読まれている日本文化論の本で、多くの日本文化論者が引用している非常に大事な文献です。風土論、われわれ文化人類学者の言い方でいいますと、「文化生態学論」といえばいいのですけれども、日本がモンスーン圏の中にあるということから議論がはじまります。そしてそこから日本の生業、稲作に言及する。稲作が日本の農村構造、それから家族制度に影響を及ぼす。そこから日本人の集団主義がでてきて、日本人の美観、美学、「和」とか「さび」とかいった価値観をつくり出していく。ついには天皇制にまで及ぶ非常に包括的な議論を和辻は出していきます。後世の日本文化論者はこの和辻論を部分的にとりあげて議論している場合が多いです。直接和辻哲郎を引用していなくても、和辻論の焼きまわしが非常に多いのです。

ここで稲作農業が主にとりあげられることにひとつの問題があります。というのは漁村はどうなるのか、山村はどうなるのかということです。稲作から日本の村落構造を導きだしてくるのなら、漁村がどうして農村と同じような村落構造をもっているのかという問題があります。これはひとつの例に過ぎないのですが、和辻論だけでなく、広く日本文化論には内蔵されたいろいろな疑問点、問題点が大いにあります。ですから、日本文化論を鵜呑みにすることはできないですが、それにつきましてはまた後で言及することにします。

集団論が日本文化論のひとつの大きな軸になっているのですが、それはどうしてでしょうか。60年代以来日本は二桁の高度経済発展をします。それをどのように説明するのか。これは海外でも大

きなテーマになりまして、いろいろ研究されているのですが、日本でもその説明に、集団論をもってくる日本文化論者がたくさん出て来ました。経営学の専門の人たちでも日本の集団論、人によっては和辻の『風土』にまでさかのぼって議論する人もいます。つまり、風土論から農村構造論へ、農村構造論から集団論へ、集団論から日本的経営論へと議論が展開していきます。日本の出版年鑑をみますと、今でも「日本的経営云々」という題の本が約20あります。これは2、30年前からずっとそうです。「日本的経営」という考え方が定着しているといってもいいぐらいです。内容をみますと、集団論的な要因がたくさんはっています。日本的経営の三種の神器は「終身雇用」、「年功序列」、「企業組合」です。その3つともが集団主義に結びついているという考え方です。

もうひとつ、日本文化論で非常に大事なことは、いままで申しあげませんでした。日本語です。日本文化のエッセンスが日本語に内蔵されているという考え方です。ことに、日本文化論の命題になっているいろいろな表現で、日本語に適した表現、日本語でなければ説明できない言葉がたくさんあります。たとえば、日本人が尊ぶ「和」とか「さび」とか、「もののあはれ」のような言葉です。あるいは、土井健郎のいう「甘え」のような表現が複合的意味を内蔵している。あるいは、日本語の文法の中に上下の関係を表現するものがあるということ、そのほかきりがいいほどいろいろあります。ということで、言語が日本文化論の中で重要な位置を占めているという議論がされています。

形質人類学のいろいろな考え方も日本文化論に安易に入ってきてまして、日本人が日本的である根本に、日本人のいろいろな形質学的要素、遺伝的要素—例えば血液型とか、疾病学的要素—があるということがよく述べられています。考古学も日本文化の特殊性を決定するのに非常に大事です。マギル大学のBruce Triggerは人類学的考古学をやっておられる方ですけれども、考古学には3種類あるといっています。ひとつは、national archaeology（国民考古学）、もうひとつはcolonial archaeology（植民地考古学）、三番目はim-

perialistic archeology(帝国主義的考古学)です。帝国主義的考古学というのは、大英帝国がやりましたように、世界中で考古学の遺跡を荒らしまわって、エジプトであろうがトルコであろうがギリシャであろうが掘りまくって、貴重な遺物を自分の国に持ち帰って大英博物館に飾っておくというやりかたです。colonial archaeologyといっていますのは、自分の植民地の考古学をやる。アメリカの考古学はほとんどこれです。アメリカの先住民、いわゆるインディアンの遺跡を発掘する。これは植民地考古学です。日本でやっているのは国民考古学です。考古学をすることによって、自分の国、民族のアイデンティティを、基礎づけていくということです。ですから、日本では考古学の重要な発見があると、すぐに新聞に出ます。場合によっては一面にでる。偽造したり、遺物を自分で勝手に遺跡に埋め込んで偽装遺跡を作ったりすると、これはもうメディアの一大ニュースになります。ということで、日本文化論には非常に広範囲にわたって命題をもっています。

日本文化論者はほとんど大学の先生です。そうでない方も何人かいます。後者で有名なのは、『日本人とユダヤ人』（山本書店、1970）を著しましたイザヤ・ベンダサン、ないし山本七平です。この人は本屋の店主でしたが、非常なインテリで、日本文化論関係の本をたくさん書いています。こういう人はむしろ数的には例外です。日本文化論の著者ははかならずしも、文科系の学者ではないんです。お医者さんも文化論を書きますし、理系の方、哲学、フランス文学専攻の方も書きます。ということは、ちょっと思いついたことを書けばすぐ日本文化論になるということです。どうして書くのかといいますと、なかなか答えが出てきません。50年代、60年代では、日本の大学の先生の給料が低かったので、こういうものを書いて収入を得ようとしたという説がある程度は通ったんですけれども、現代の世の中ではそういう説明は通りません。ではどういう説明があるのだろうかといいますと、ひとつは、日本の学者の、社会的な地位、日本社会というコンテキストの中における学者の地位ということで、日本の学者には社会からの認知を求める先生が非常に多い。そう

いうことには無頓着でも学界では有名な先生もおられますが、社会から認められることを求める先生方もたくさんおられます。社会一般から評価されるのもひとつのありかたであるということを日本の学者の世界では認めています。そういうことで学者が一般的な、啓蒙的な本を書くことは日本では当然と思われがちです。アメリカではそういう傾向がまったくないのです。

アメリカでは学者が認められるということは、学者の世界で認められるということで、一般の人たちに認められるということではないのです。一般向けの本を書く人はpopularizerと呼ばれます。

“popularize” というのは辞書をみれば難しいことをやさしく一般の人にわかりやすくするということですけれど、そこには、辞書に出ていない価値判断があります。と言いますのは、popularizerは学者として風上にもおけないということです。一般向けのものを書く間に研究をし、専門的なものを書くべきだ、研究の出来ないものが一般書を書くんだ、と言う考えです。アメリカでは、ご存知の方もいると思いますけれども、たいていの大学では就職後5、6年は終身雇用（tenure）の身分ではありません。5、6年たって審査があって、そこで解雇になるか、あるいは終身雇用になるかの決定があります。それまでに業績をあげなくてはならない。そういうときに“popularizer”といわれるようなものを書いていたら、それがマイナス評価になり、tenureのチャンスを失う危険が多いにあります。私たち年配の者が若い人たちにアドバイスする時に、一般啓蒙書は書いてはいけなくと教えます。学者は学者の世界においてのみ認められるように専念する。それがアメリカのやりかたなのです。そこでアメリカと日本の違いが対照的に浮き彫りになってくると思います。

ここで日本のあり方とアメリカのあり方とを比較してどちらがいいとか悪いとか、いっているのではありません。日本のやり方にいいところもあります。学問の世界で創出されたいいろいろな難しい議論、考え方というものを分かり易く一般の人たちに知らせる啓蒙的な役割を学者が果たすのは、社会にとって非常に良いことだと思います。アメリカでは啓蒙的役割を果たす学者が皆無に近

いことは残念なことだといえます。

そういうことで、日本人論を書く学者は日本の一般社会の中では割合良く知られています。1987年に関西学院大学の真鍋一史先生と私が共同で西宮市を対象に、日本文化論について無差別アンケート調査をしました。日本文化論を書いている著名な方々の名前を出しまして、「この人の名前を聞いたことがあるか」、「この人の書いた本を読んだことがあるか」、と質問をしました。そのなかで50パーセント以上の人が知っているというのは金田一春彦だけでありまして、残念ながら我々人類学者の英雄である中根千枝さんも50パーセントには達しませんでした。しかし、たとえ20パーセント、30パーセントであっても、これは非常に大きな数字です。日本人口全体からすれば2、3千万人も数です。アメリカでは、学者の名前がそんなに大きなパーセンテージで一般の人々に知られているということは、まず望めない。それに反して、日本文化論を日本語で書いている学者たちは日本人にしろ、外国人にしろ一般の人々の間で知名度が比較的高いということが言えます。

ここで日本文化論を書いている日本人と外国人との間に交流があることを忘れてはいけません。私はあえて日本人の書いた日本文化論を今日取り上げると申しあげたのですが、彼らの書いている日本文化論も外国人の書いたものにいろいろ影響されているので、純粋なものではないのです。外国のアイデアにいろいろ「汚染」されているといってもいいかもしれません。そういう意味では外国人の書いている日本文化論も日本人の文化論者に「汚染」されています。お互いです。ライシャワーの書いた『ザ・ジャパニーズ』（文芸春秋、1979）を読みますと、中根千枝の『タテ社会の人間関係』（中公新書、1967）を推薦すると書いてあります。また日本人の書いた日本文化論を見ますと、ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』（TBSブリタニカ、1979）に日本文化についてこう書いてあると、肯定的に評価している。あたかも、ボーゲルが書いているから正しいと言う意味合いです。そして、ボーゲルはボーゲルで、土居健郎が「甘え」についてこういって

いるから正しいかのごとくに英語で書いている。このように日本人の日本文化論と外国人のそれには正の相関関係があるという事を忘れてはいけません。にもかかわらず、私は基本的には日本人の書いたものと外国人の書いたものとは違いがあると言うことはすでに申しました。

日本文化論には命題と前提とがあると申しました。前提としては、たとえば「日本社会は単一民族で形成されている」、あるいは「日本文化は純粋文化である」と言ったものがあると申しました。「日本文化は同質文化である」という表現もされています。この言説のなかにはもっと根本的な前提があります。それは生物学的にいう日本人、そして日本語、日本文化、及び日本列島、この四つの要素が概念的に等半径の同心円であるという考え方です。つまり日本列島に住んでいる人は皆日本人で、日本人は皆日本語を話し、日本語を話す人は皆生物学的に日本人で、日本文化を担っているという考え方です。それは問い詰めたらちょっと変ではないか、必ずしもそうではないのではないか、例外もあるのではないかと気が付きます。例えば日本列島に住んでいても、アイヌ民族は日本民族と違った文化をもっています。また、日本語を話していても意識としてはコリアンの人も多くいます。しかし、一般に話をしていると、普通の人ではこの「同心円」的思考を持っている人が非常に多い。たとえば、ラテンアメリカから日系人が来ます。もう3世4世でポルトガル語しか話せない。それをみて、普通の日本人は、「あなたは日本人のような顔をしているのに、どうして日本語が話せないんだ」と、そういう質問をします。それを聞いている周りの日本人も、そうですねと同意します。まわりの人に、「そんな変な考えないでしょう。人間であるというということとどういう言葉を話すこととは全く別個の次元じゃないですか」と開き直って議論をする日本人はまずいません。なぜかと言いますと、「同心円」的思考が日本社会を風靡している、そして、それ以上に同心円の思考は日本社会の価値観、ひいては世界観ないしイデオロギーになっていて、そのイデオロギーに沿った言説が日本人の世界観の基礎になっているからです。

有名な政治家、大臣級の政治家が、いろいろ突拍子もない発言をしています。「日本民族は単一民族だから、よく働き、高度経済成長が可能だったんだ」とか、「アメリカ人は雑種民族だから駄目なんだ」とか言っています。これは、日本文化論の前提からでてくる考え方です。一般の日本人は「そんなことをいままさら言っている」とは言いながら、それは基本的欠陥のある日本文化論に基づいた言説だと言う批判ではなく、政治的な問題として片付けている人が多い。「そんなことを言うべきではないのに言っている」、というような考え方です。つまり、いまポピュラーな表現をしますと、politically correctでないから言っただけなんだという考え方です。「実際は政治家の言っていることは正しいけれども、言っただけなんだ」と言う考え方がはびこっている以上、日本文化論はいまなお健全だと言ってもいいと思います。

「日本人は集団的である」とか、「日本人は和を尊ぶ」とかいう日本人論の命題で非常に危険なのは、このような命題が、日本文化をただ単に、客観的に描写したものであるのか、あるいはそれを肯定的に評価したものであるかということです。「日本人は和を尊ぶ」という命題とその反対の「日本人は和を尊ばない」という命題の二つのうちどちらを選ぶかと言えば当然前者を選ぶでしょう。そうすると、これはただ単なる客観的な描写ではなくて、そこには、命令形が入ってきます。「日本人は和を尊ぶべきだ」ということになります。ですから、日本人論の命題はただ単に日本の文化はこうだ、日本人はこうだということではなくて、日本文化はこうあるべきだ、日本人はこのように行動をしなければならないということ暗に含んだ命題です。

これを明確にしましたのは、大平総理大臣が作った私的諮問機関である「平和の時代調査委員会」で、その委員は山本七平、小松左京、公文俊平、佐藤誠三郎などで、公文俊平と佐藤誠三郎は村上泰享と『文明としてのイエ社会』（中央公論社、1979）という有名な日本文化論の本を出しています。当然彼らの答申には政治家が聞きたいことが書いてあります。大平総理大臣が聞きたかつ

たのは、日本文化論が健全であるということでありまして、この答申には「日本経済が高度成長に成功したのは、日本人が集団的であり、和を重んじ、上下関係を尊ぶからである」という意味のことが書かれています。日本文化論はかくして政治政策の議論にくみ込まれた。日本文化は、日本文化論の謳う純粋文化、単一民族文化であり、それはとりもなおさず日本国家の文化であるということです。日本国家の文化であるということは、日本国家に存在する人間、アイヌであろうが沖縄人であろうがみんな右へならえで和を重んじ、集団に忠誠でなければならないことになります。そこには、国家と民族とを同一視している、非常に危険な考え方を暗に内包しています。日本国家の中にはいろいろな民族がいるということは自明のことです。ここでくどくど 申しあげる必要はありません。ここで申し上げたいのは実証（現象）の次元と、イデオロギーの次元のギャップが無視されている、イデオロギーの次元ではいまでも単一民族、純粋文化といった考え方があり、現実の日本の多民族社会を無視しているということです。

どうして多民族、多文化の事実が無視されるのかといいますとーこれは非常に大事なことで一端的にいいますと、日本文化論の代替になるイデオロギーとしての文化論が、選択肢として日本の国民に与えられていないからです。もうひとつの、別の文化論（イデオロギー）があれば、日本の国民も、従来の考え方ではなくて、こちらの考え方も一応考慮にいれることができるのですが、それがありません。だから従来の日本文化論が覇権を握っている。ヘゲモニーになっている。と言うことで、私の本には“Hegemony of Homogeneity”という題がついています。

これは日本の政治事情に非常によく似ています。日本の政治は1. 5の政党政治といわれています。どういうことかといいますと、自民党が日本の政治を牛耳ってしまっていて、それはかわらない。反対をする野党があっても、野党は野党に徹していて与党にはなり得ない。アメリカの政治は二党制政治でありまして、共和党と民主党が交代してアメリカの政治をやっている。それとは対照的に日本は1. 5党制政治であるといっ

ています。野党は「反対、反対」といってればいい。自分で、包括的な政策というものを提供する必要がない。それは与党がやることでありまして、与党の方では日本の全体的な政治を把握しなくてはならない。そうした中で政策をつくり、法案をつくっていく必要がありますが、野党の方は、各法案に反対していればよい。ですから、ここでは、本当に与党に反対する選択肢が国民に与えられていない。与党が提案する包括的な日本の政策というものに対抗する包括的な政策というものを野党が提出して、国民に訴えることができれば、本当に与党に反対するものになるんですが、そういうものがない。

もうひとつこれ似たことがあります。「日の君反対運動」です。「日の丸反対」、「君が代反対」、この運動は戦後以来ずっとあります。今でも続いています。反対派は反対する理由をいろいろ挙げているのですが、そしてそれは反対としては説得力のある意見なのですが、「日の丸には反対だからここに別の国旗になりうるものがあるんだ」と代替国旗のデザインを作って、そういうものを提出したことがあるのでしょうか。ないことはないんですが、日本国民に広く知られるものは全然ないんです。「君が代」もそうです。「君が代反対」と言いながら、じゃあ、君が代にとって代わる国歌があるのだろうか、そういう代替の国歌を作って、そしてそこに歌詞のみならず曲もつけて、国民に訴えるということが真剣にされたことがあったのでしょうか。「日の君」反対運動の中でそういうことをやっている人はまずない。ですから、「日の君」反対運動も、ただ反対運動に徹して、反対運動だけに終わってしまう。これは野党がやっていることとまったく同じなんです。

もうひとつ例があります。オランダのジャーナリストのカレル・ファン・ウォルフエレンという人が10年前に『日本・権力構造の謎』（早川書房、1990）という題の本を出しました。わりあい売れた本です。ウォルフエレンは日本の政治に非常に批判的でありまして、日本に民主主義はないといっている人なんですが、最近また、『怒れ、日本の中流階級』（毎日新聞社、1999）という本

を書きました。どういう内容かといいますと、日本の中産階級やインテリ層は日本の政府に対して批判的だが、それがひとつの大きな力、エネルギーに凝縮して、政府を倒す力にならないといっているのです。日本の知識人も、著名な月刊雑誌、あるいは新聞に政府を批判する、攻撃する論文をいろいろ書いています。しかしそれは個人的なレベルでの攻撃に終わってしまって、そういう人たちが集まって、そして政府を打倒しようという運動にはまずならない。ですから、知識層レベルでの政治運動も、今申しあげたような1.5政党政治に似たようなものでありまして、「反対、反対」といいながら反対のエネルギーを建設的に利用しようとしません。日本文化論も同じようなことです。体制を根本的にやつつけよう、打倒しようという文化的な構造が日本にはないと思われます。

だいぶん長くなってきましたので、最後にちょっと申しあげます。日本人の文化的なアイデンティティを批判した外国人が書いた本が二、三あります。ピーター・デールの *The Myth of the Japanese Uniqueness* (St. Martin's, 1986) と、言語学者のロイ・アンドリュ・ミラーの *Japan's Modern Myth* (Weatherhill, 1982) はどちらも日本文化論を批判した本で、どちらも「神話」という言葉を使っています。ということは、日本文化論の言説は真実ではないということで、頭からから日本文化論をけなしてかかる姿勢で書かれている本です。ごく最近、Michael Weiner編著の *Japan's Minorities: the Illusion of Homogeneity* (Routledge, 1997) にも、日本文化が等質だと言うのは嘘だ、イリュージョンだと批判しています。どれも日本文化論で主張されている命題は本当ではないという立場から議論をし、その虚偽性を証明し、日本文化論を真っ向から批判しています。

韓国にはシャーマンがいます。シャーマンは死人だ人との会話ができるといいます。これについて二つのアプローチがあると思います。ひとつは死人と意思疎通ができるということは科学的にありえないと、真っ向からそれを否定してかかる。シャーマンの言うことがいかに馬鹿げているかと言うことを書くやりかたです。それが今言いま

したピーター・デールやロイ・アンドリュ・ミラーのやりかたです。

もうひとつのアプローチは、シャーマンがそのような主張をすること、そのものが現象として研究の対象になる、と言う考えです。シャーマンはどうのような背景を持った人だろう、どのような場所でどういう状況のもとに死者とのコミュニケーションが可能なのか、どういう言説がそのような考えを支えているのか、それを調べてみようというやりかたです。これが文化人類学的なアプローチです。私が日本文化論を分析しましたのも、今申しあげたような第二の立場から調べようということでありまして、日本文化論の中には、馬鹿げたとと思われるような命題もありますけれども、それは馬鹿げている、いないということが問題ではなくて、そういう命題があるということが大事なことです。そして、どうしてそのような命題が信じられるのかということを考えなければならないということです。

最後に日本文化論の歴史、日本人のアイデンティティの歴史をたどっていかうと思ったんですけれども、これは時間切れになりましたので、皆さんの中でそれに関連する質問がありましたら、その機会に申しあげたいと思います。一応ここで私のお話しを終わらせていただこうと思います。ご静聴ありがとうございます。

#### 質疑応答

質問者①：これまた日本人論かどうかは知りませんが、日本人ほどなんやらかんやら人からいわれることを好んでいる人はめずらしいと思うんですね。こんな日本人論というもの、自民族の論というか、それを好んでいる、なんやかんやいわれても、けなされても買うでしょう本を。これって不思議なものですね。そこらへんはどのように考えられていますか？

さきほどのアイデンティティの話それについて少しお願いします。

ベフ：まったくおっしゃるとおりです。日本人は外国人が日本をどう思っているだろうということに非常に気にしている民族です。と



いうと非常に本質論的なことをいっているみたいですが。外国人に日本をどう思いますかということをお聞きしたいと思います。この質問を今日、日本に着いたばかりの人に聞いてみても、別におかしいとは思わない。そこが日本人の姿勢をあらわしていると思います。アメリカ人は外国から来た人にはそういうことをほとんど聞かないです。アメリカについては我々アメリカ人のほうが外国人よりもよく知っているはずだから外国人に聞く必要はないという、不遜とも取れる態度をします。ですから、外国語で書かれたアメリカについての本で、英語に翻訳されたものはごくわずかです。私が知っている限りでは、一冊か二冊ぐらいです。ひとつは、de Tocquevilleが書きました『アメリカの民主主義』です。これは110年前に書かれた本ですが、それがいまだに売られている、非常に大きな例外です。日本人はそれに反しまして、外国人が日本人について書いたものをどんどん翻訳している。先ほども申しあげましたように、野村総研の文献目録では、その10%が外国人の著書です。その後も非常に多くのものが出ていますので、100や200ではおさまらない数です。

どうしてそうなるかということですが、その根源はやはり日本の開国の事情にあると思います。1853年にペリーがアメリカの艦隊をひきつれて江戸湾に入ってきます。そして大砲を江戸のほうに向けて開国しろと、いわゆる「軍艦外交」を始めます。結局日本は力に屈して開港しました。攘夷論はたけなわだったんですが究極には開港開国余儀なくされる。そして非常に屈辱的な条約を結ばされる。日本が輸出する商品には税金をかけてはいけないとか、日本の法律がまかりとおらない外人居留地を横浜につくるとか、軍事条約においても日本の軍力はアメリカ、イギリス以下でなくてはならない。そういう非常に屈辱的な経験をします。日本はいっさい欧米に負けてしまいました。思想的に負けてしまう。頭で負けてしまう。ですから、ただ、軍事力で負けたとか、経済面で負けたとかいうことではなくて、文明として日本はだめで、欧米の文明のほうが優れているというような考え方になっていく。その結

果、明治のはじめには、もう日本語は止めて、ヨーロッパの言葉を日本の国語にしようと提言する人が出てくる。また、日本人はヨーロッパ人と結婚した方がいい、そして、ヨーロッパ人の血を日本人のなかに入れた方が日本民族はもっと優秀な人種になるというような意見も出たくらいです。このような劣等感が是正されるまで何十年もかかりました。

明治の後期になってきますとこのような欧米崇拜主義の考えが衰えてきます。そしてその反対の国粋主義が台頭します。ところが、太平洋戦争に負けると、また明治初期のように日本の文化はだめだ、日本が負けたのは日本の文化がだめだからだ、日本の家族制度がだめだから、或いは日本には封建遺制があったから負けたんだ、このような伝統的日本文化は一切だめだ、いいものはアメリカだけにしかないんだ。だからアメリカの文化をとりいれなければいけないんだという考え方が風靡していました。そういう考え方は、多かれ少なかれ明治以来ずっと続いていまして、戦争中でさえ、そういう考え方は続いていました。日本人が外国の人たちの考え方に対して非常に敏感である。そして外国の考え方をどんどん取り入れていく一面は、日本人の劣等感にあると思います。その反面、日本には日本人優秀論もあります。それも、明治以前からめんどめんどと続いています。このふたつの考え方、日本人優秀論と日本人劣等論が時代によってその頭を上げたり下げたりして現在にいたっています。その劣等論が外国人の考え方に対して非常に敏感にさせると私は思っております。

質問者②：えー、I have question, excuse me。私は75歳のじじいでございます。ドイツの文化論、文明論ですね、これは非常に明確にされていますけれども、「文化」といわれることと、「文明」ということの差異点をちょっと一番簡明に教えてくださいたいと思います。

ベフ：文化と文明の違いということですね。文明というのはいろいろな文化というものを包括し、文化の上にある大きな思想です。たとえば儒教、あるいはイスラーム、あるいはキリスト教のような思想、それはいろいろな文化の違い

をこえてあるものです。「文化」という概念にはいろいろな考え方がありますが、ひとつの考え方としては、民族が先ずあり、その民族に付随したものとして文化があるといえます。文明はいろいろな文化、あるいは民族をこえてみられる思想、イデオロギーだというとらえかたをしてはよいのではないかと思います。文化の定義には色々ありまして、いま申しあげた定義では通らない、いろいろな状況もありますが、今日は端折っておきたいと思います。ただいま申しました定義を日本に当てはめる場合に、すこし考えにくいことがあります\*と申しまのは、日本の場合は、文明と文化が重複しているからです。もう10年ぐらい前にハンチントンが『文明の衝突』という本を書きまして、その中に9つの文明を認めています。その中で、日本文明を認めています。文明と文化が同一である、重複している唯一の文明として日本文明があると彼はいっています。

橋本和也：京都文教大学の橋本でございます。ひとつは、日本文化論研究という視点なんです。これは最近ひとつの領域として、たとえば私が知っているのは「日本文化論の変遷」というようなことで否定的な日本人観からまたは肯定的な日本人観と常に揺れていくというような、いまベフ先生がお話になったようなこともひとつあるかなと思います。ひとつお聞きしたいのは、先ほど途中で、ひとつの文化論しかないの、もうひとつの、たとえば選択するような文化論、日本人論というようなもの、またはそうでもなくてもよろしいのですが、そういうものがあれば少しは状況がよくなるだろうというお話ですが、先生自身がそれを提示なさるようなことはございますでしょうか。

ベフ：代替日本人論の提案はあることはあります。たとえば、「日本社会階層論」があります。一億総中間層という考え方も今は崩れてしましまして、日本は階層社会であるという考えかたです。マルクス主義の考え方で日本社会をくくってこうという考え方もあります。それ

と、少し関連があるのは、紛争論です。日本は江戸時代から、数多くの百姓一揆があり、近代社会になりまして、産業紛争が絶えなくありました。ですから、日本社会にも紛争モデルがあってもいいという考え方を出している人もあります。ですけれども、こういういろいろの考え方は、あくまでも学者が唱えているのに過ぎなく、一般的に受け入れられていないんです。一般の人がついてこない。私がいつているのは、一般の人たちがついてこられるような代替の日本文化論が必要だということです。橋本先生は、「じゃあ、お前はどのようなものがあるのか」とおっしゃいましたけれども残念ながら思いつきません。そういうものが考えついたら、それを書いて少しは金持ちになっているかもしれません。私もそこに、日本文化論を議論するものの落とし穴があるのではないかと思います。おっしゃるように、日本文化論をやるなら、代替を提案したほうがよいのではないかとと思うのですが、論理的にはなくてもいいんです。ですけれども、それは日本の政治で野党が「反対、反対」といつていることと同じです。代替がないというのは、日本文化論批判の説得性を欠くのではないかという反省は私にもあります。

米田 量：京都文教大学大学院のM1の米田と申します。日本人の劣等感というところですが、興味をもたせていただいたんですけれども、開国の時点で、僕も日本人というものが傷つけられてしまったのかなというようなことを思ったのですけれども、それ以前というものは、日本人は劣等感というものをもっていたんでしょうか。そしてこの劣等感というものが日本人が日本人を再発見する過程においていずれかは消失していくものなのかなと思ったんですけれども、そこらへんはいかがでしょうか。

ベフ：明治以前に劣等感があったかどうかということですね？

米田 量：外国からの圧力というか、頭で勝た

れてしまったというところで日本人がすごく傷ついてしまって、そのカウンターとして日本人優秀論とかもあったりするのではないかとか思ったんですけれども。

ベフ：ないでもなかったんです。江戸時代を風靡していましたイデオロギー、ことに政治的なイデオロギーは儒教です。日本の政治哲学のなかには儒教的な要素がふんだんにある、むしろ、儒教を基礎にして政治政策があるといっても過言ではないと思います。ですから、中国には頭があがらないということがありました。それに対応するかたちで18世紀の末期から国学がでてきます。賀茂真淵とか、本居宣長とかいった国学者が輩出されます。中国というのはそんなに立派な国ではないんだ、日本のほうが中国よりも偉いんだということを言わんがために国学というひとつの学問体系をつくっていきます。国学の内容は、日本文化論の内容、その精神的な内容を包括したものとみていいと思います。ですから劣等感というものは江戸時代からあったと考えてよいと思います。

将来、そういうものがなくなるのかどうかということですが、過去かれこれ150年、200年も続けられてきたパターンが簡単になくするとは思えない。政治家の中には「日本は経済大国だからアメリカに引けを取らなくてもいいんだ」とか、またアメリカの悪口をいう人もいますし、アメリカに「NOといえる日本」ができたと言っていばってる人もいます。ところが今日の新聞を見ますと、日本の新任総理大臣はさっそく「ワシントン詣で」をすることになっています。これは、歴代の総理大臣のすることです。総理大臣になったら、さっそくワシントンにいったって、挨拶をする。ところが反対のことはしない。アメリカの大統領が就任して、さっそく東京にとんでくるということはまずない。日本人はそれを不思議と思わない。それが悪いとは思わない。アメリカ人は横柄だともいわない。日本の総理大臣がアメリカに行くのは当たり前だと思っている。そういうところに、いまだに日本人の劣等感がのこっている。当

然、劣等感だけではなくて、そこには地経的、地政的力関係も当然あるんですけれども、私はそれだけではないと思います。

日野克美：京都文教の日野ですけども、先生はアメリカの方を例に出して、非常に際立った、日本人とは際立ったことであげられましたけれども、イギリスなどを取り出すとまたおもしろいかなと思ったんですけれども。結構イギリス人は自分のことをいろいろ書かれているのを楽しんで、イギリス人はいかに変だとか、ここがおかしいとか、そういう本がイギリスでは売られているみたいと思うんですが、こういう風にいるんな国からみると、日本人論というものがもうちょっとバランスがとれるかなと思うんですが、こういう点、またその自分のことをこういうふうに書かれて喜んでいる国というのは先生の知っている中で他にありますでしょうか。

ベフ：もう時間だそうで、座長から簡単にしろと言われていしますので、端的に申しあげますけれども、まったくそのとおりです。日本文化論の弱点は、すぐ日本はユニークであると言います。しかし、どうしてユニークかという、アメリカにないからユニークだとか、ヨーロッパではないからユニークだとか、そういう乱暴な議論になってくるんです。ユニークであるということを用いるには、世界中のあらゆる文化全部をとりあげて、調べてみて、どれにもない、日本だけだということを実証してからこそユニークであるといえます。ですが、そのような証明をした日本文化論はひとつもない。ですから、日本文化論を考えるのに、日本文化がどういう文化と比較されているのか、いくつの文化と比較されているのか充分に検討する必要があるにあると思います。

日野舜也：最後に、職権でひとつ。ベフ先生も戦争中日本で少年時代を過ごされまして、僕もそうなんですが、第二次世界大戦の時にアメリカなんか日本と戦争するということで、ベネディクトをはじめとして日本研究がものすごく

はじまったわけですが、日本は逆に英語を習うこともいけない、外国のことを学ぶこともいけないというようなかたちで、あれは僕は日本文化を考える時にものすごくおもしろいことではないかなと、いつも思っているんですが、その点についてちょっとコメントがいただければ。

ベフ：私も同感です。非常にこれは対照的だったと思います。私は当時中学生でした。どこの中学でも英語の授業をどんどん廃止していく傾向が非常に強かった事実があります。やはりこれは日本人の日本精神の強さを誇張した考え方からでてくるのではないかと思います。つまり、日本は、日本精神で勝てるんだと。だから、敵国のことを知っても知らなくてもどちらでもいいんだと。日本魂さえあれば勝てるんだ、竹やりでも勝てるんだという、考え方がまかり通っていたところにそういうことがあったと思うんです。

ついでに申しあげたいのですが、私が通っていました大阪の今宮中学校の岩橋繁雄校長は、それに真っ向から反対する意見をもっていました。敵国の言葉であるからこそわれわれは英語を勉強しなければならない、敵に勝つためには敵国の言葉、文化を知らなければならない、ということで、英語の時間を一時間も減らしませんでした。それだけでなく、私の習っていた修

身の先生が徴兵にとられていきましたら、校長先生が代わりに終身の時間の担当となりました。岩橋先生は、修身は実践するものであって、本で読んで覚えてもなにもならない。修身の教科書をかたづけろ、その代わりに英語を勉強するというんです。そのときに使いましたテキストは、1944年、戦争の真っ只中で、ルーズベルトが第3回の大統領選挙運動につかった演説なんです。戦争中にどういうルートで手に入れたのか、私はまったくわからないですけれども、そのスピーチというのは、後世非常に有名になりましたスピーチで、「川を渡っている最中に馬を乗り換えるな」と言う意味のことを言っているんです。つまり、いまは戦争の最中だ。戦争の最中に大統領を代えては戦争の方針が変わる、それではいけない、と言っているのです。校長先生はこれを私たちに読ませて、「日本はどうなんだ。総理大臣が次々と代わっている。外国をみてみろ。蒋介石にしろ、スターリンにしろ、ルーズベルトにしろ、チャーチルにしろ、戦争のはじめから一貫してリーダーである。日本は総理大臣を次々と変えていって、そんなことで戦争に勝てるはずがない」、そんなことをいっていたんです。ちょっとしたエピソードですけども付け加えておきたいと思います。